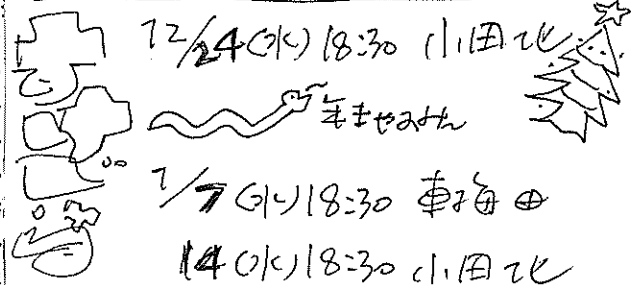


Freude

vol. 19-7 2025. 12. 17wed



♪ 大阪フロイデ合唱団に入ると嬉しいこと 26 ♪

1. いずみホールのステージに立てる。
2. オーケストラと一緒に演奏できる。
3. 憧れの声楽家と一緒に演奏できる。(並河寿美, 福原寿美枝, 清水徹太郎, 田中由也, 各先生)
4. モーツァルトのレクイエムを歌いたい。再来年らしいが今から入っとくといいかも!?
5. モーツァルトのアヴェ・ヴェルム・コルプスを歌える。聴いたことあるし歌いたい。
6. ハイドンの、知らなかった作品を歌える。
7. ふ〜ん、ハイドンってそんな長生きだったの〜、と知らなかったことを知ることができる。
8. ホントにステージに立てるの? と不安だっただけに演奏会ができると「超・達成感!」
9. 「達成感を得られる」のがこれほどハッキリ見えるものは無いかも。拍手もらう気分最高!
10. クラシックに縁がなかったが、実は知ってみたかった。きっかけ欲しかったのでラッキー。
11. 勝手に堅苦しいものと思っていたら、そうでもなかった、と知ることができたかも。
12. あんまり関心を持てなかった世界のいろいろに、歌詞を通して目を向けるようになった。
13. 一人だけではできない趣味、というものを知ることができる。
14. 声を合わせる、ハモる、って、ぴったりできると、すごい気持ちいい。
15. 会社や学校とは違う、人の集まりに出逢える。
16. へ〜、こんな人も居るんだ〜、と、個性的過ぎてびっくりすることができる。
17. こんなに年齢幅のある集まりも珍しいかも。
18. トシ聴いてびっくり。うわっ元気! ちょっと見習いたいかも。
19. 単に「一緒に合唱する」ことが目的の、利害関係のない人間関係がうれしい。
20. 立って呼吸いっぱいして表情も動かすから、健康にいいかも。
21. ○○ちゃんのお母さん、ではない自分でいられる。
22. ○○部の△△係長、ではない自分でいられる。
23. このトシになって、こんなにボロカス言われるなんて得難い体験かも。
24. 先週ボロカスで腹立ったから、やけくそになって練習して行ったら、今週は褒められた。
25. 努力が報われることを実感できるなんて、他ではなかなか無いかも。
26. 近寄り難そうに見えるけど、実はオモシロイ人らしい。

1〜7は、もともと音楽に関心がある人向け? 8以降は音楽に縁のない人にとっても!

あなたの感じている魅力をあと4つ足して「嬉しいこと30」にしてみてね!

それにしてもあまりの魅力に、書きながらビックリ\(\◎o◎)/! これで見ると「入ってみたいら楽しんでくれそうな、潜在入団希望者」たくさんいらっしゃるかも! ちょっと「何かしたいなあ」と思ってるアノお友達に、あなたの一言をチラシに添えて誘ってみてくださいね~(^.^)

ハイドンの後期六大ミサのお勉強（ネットうけり）

ハイドン（1732～1809）作曲のミサは13曲。そのうち、7曲は1782年までに作曲された。オーストリアの君主ヨーゼフ二世が、教会の勢力をそぐために、多くの修道院を閉鎖したのは、1782年頃であり、その後、ハイドンは、教会音楽を作曲していない。ヨーゼフ二世が亡くなる1790年まで、ハイドンだけではなく、モーツァルトを始め、他の作曲家も教会音楽の作曲をしない時代となった。ハイドンは、1790年に30年務めたエステルハージ家の楽長職を、当主の代替わりにより一旦辞し、ロンドンでの演奏会など1795年まで忙しくしていた。その間、エステルハージ家で当主が替わる、4人目の当主ニコラウス二世は、ロンドン滞在中のハイドンに、また楽長として戻って来てほしいとの要請をし、そこでハイドンが楽長としてエステルハージ家に復帰したが、それまでの間は、ハイドンは、教会音楽から遠ざかっていた。

ニコラウス二世は、教会音楽に関心があり、侯爵夫人であるマリア・ヘルメネギルトの命名日の祝祭のために、毎年新しいミサ曲を作曲する事を、ハイドンに命じた。そこで、1796年から1802年まで、毎年一曲ずつ、新しいミサ曲がハイドンにより生み出された（なお、1796年に1797年の分含めて2曲作曲しており、また、1800年にはミサ曲の作曲を行っていない）。ハイドンの後期ミサ曲6曲は、交響曲の作曲を全て終えたハイドンにより、より交響曲の手法が取り入れられ、ハイドン研究家のH.C.ロビンズ・ランドンは「ミサの言葉を用いた、声楽とオーケストラのための交響曲」と名付けている。

♪ハイドン後期六大ミサ・1796年「ハイリッヒミサ」・1796年「パウケン・ミサ」・1798年「ネルソン・ミサ」
・1799年「テレジア・ミサ」・1801年「天地創造・ミサ」・1802年「ハルモニー・ミサ」

●「ハルモニー・ミサ」はハイドンの作曲人生における最晩年の作品であり、ハイドンが完成させた最後の大規模作品。伝記によると作曲に7カ月も要した。ハイドンは、この『ハルモニー・ミサ』を「骨の折れるほど苦勞して作った」と言っている。「ハルモニー」とは管楽器のことで、本作では六大ミサの中で、管楽器が最大規模に達している。1802年9月8日にアイゼンシュタットのベルク教会で初演された。

フルート(1)、オーボエ(2)、クラリネット(2)、ファゴット(2)、ホルン(2)、トランペット(2)、ティンパニ、弦楽合奏、オルガン。独唱：S, A, T, B。 合唱：4声部。

モーツァルト「戴冠式ミサ」（ネットうけり）

モーツァルト（1756～1791）の生涯は前半のザルツブルク時代、後半のウィーン拠点時代に大きく2分されますが、K317.戴冠式ミサはその過渡期にあたる作品です。モーツァルトの時代、音楽家の勤め先は主に教会であり、父子ともザルツブルク大司教に仕える生活でした。ヴォルフガング少年の才能を愛し、モーツァルト父子の自由な演奏活動を許したシュラッテンバッハ大司教が1771年に亡くなり、コロレド大司教になってからは、モーツァルトは「ミサ音楽は、教会儀式がメインであり、音楽は添え物」といったコロレドの音楽への無理解に苦しむことになります。それでもなんとか勤めていましたが、とうとう1777年、いったん教会の仕事を辞めます。職を求めて母とともにパリなどへ音楽旅行をするものの、就職は決まらず、1778年には最愛の母を亡くし、父の口添えもあり、やがて、1779年ザルツブルクのオルガニストとして再就職するのです。しかし、もちろんコロレドへの不満は消えるはずもなく、とうとう1781年決別、ウィーンに拠点を移すことになります。

●「戴冠式ミサ」は、母を亡くした憔悴の旅から戻り、ザルツブルクに再就職したときに作曲されました。

1779年4月4日初演。モーツァルトのザルツブルク時代のミサ曲の中では、もっとも演奏回数が多い人気曲。コロレドの「演奏時間制限」に苦しみつつも、その中で「自分の音楽を発表する機会」として自身の音楽を隅々まで行きわたらせる天才ぶりが、最も開花した1曲と言えるでしょう。

オーボエ(2)、ファゴット(1)、ホルン(2)、トランペット(2)、トロンボーン(3)、ティンパニ、弦楽合奏、オルガン。独唱：S, A, T, B。 合唱：4声部。